

おっしよべ祭り



毎年8月に開催されるおっしよべ踊り

毎年八月最後の木・金・土曜日に開催される俗にいう「おっしよべ祭り」は、本来、白山開山の泰澄たいちよう大師が養老二年（七一八）に粟津温泉を開いた開湯祭りひらいたつゆまつりで、古くから賑にぎわった。そして二晩踊られる「おっしよべ踊り」には次のような伝説がある。

江戸時代の頃、古くから湯治場とうじばとして知られた粟津にはたくさんの湯宿が栄え、とある湯宿に一六歳になる「末すえ」という下女の娘がいた。宿ではこの娘を「おすえべー」

と呼び、さらに訛なまって「おっしよべ」と呼んだ。このお末をみそめたのが、向かいの湯宿で働く一九歳の下男しもやの竹松であった。働き者の二人はいつしか顔見知りとなったが言葉をかかわせず、お末の恋情は日増しに強まるばかり。ある雨の夜お末は意を決し、竹松の宿



お末と竹松の銅像(小松市井口町のポケットパーク)

に忍び込んだが屋根から足を滑らし転げ落ちた。お末が自らの恋心を告白するため怪我したことは栗津中に知れ渡

り、それを聞いた竹松はお末を見舞って自分もお末に惹かれていたことを告げ、ついに二人は夫婦になることができた。

その後この話は明治初期に旅館の接待として働く武家の娘たちによって、当時あった「ひとつとなー」と始まる農作業の数え歌を替え歌にした「おっしょべ節」がつくられ、同時に踊りもつくられた。「おしょべナー 十七湯宿の窓にもたれ 誰に栗津（合わず）のもの 想い」。そんな粋な歌詞で湯女が踊る温泉情緒は、今やすばらしい北陸を代表する観光の文化資源となっている。

その他、虫送り太鼓に由来する「おっしょべ太鼓」や祝意を表す「あわづ三番叟」の三人舞の芸能が伝えられている。（小林忠雄）



おっしょべ太鼓(平成22年8月)



あわづ三番叟